



## 報告 中上級日本語学習者のための作文ガイドブックの開発

著者	木戸 光子, 加藤 あさぎ, 小池 康, 平形 裕紀子, 石川 早苗, 君村 千尋
雑誌名	筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集
巻	34
ページ	41-58
発行年	2019-03-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00154896">http://doi.org/10.15068/00154896</a>

# 中上級日本語学習者のための作文ガイドブックの開発

木戸 光子    加藤 あさぎ    小池 康    平形 裕紀子  
石川 早苗    君村 千尋

## 要 旨

本稿では、中上級学習者のアカデミック・ジャパニーズのための作文学習を支援する作文ガイドブック作成に至る過程を概説し、試作した作文ガイドブックについて報告する。作文学習の際、日本語レベルを超えて共有すべき学習項目を特定し、レベル縦断の内容として各レベルの学習者が必要に応じて参照できれば、より学習効果が上がると考える。そこで、大学の補講日本語コースの中上級作文クラスにおいて、コースシラバス作成、レベルチェック作文分析の結果を踏まえて、作文ガイドブックの作成を行った。複数のレベルで誤用が見られる文体と文脈に関わる文法的な表現の中で学習項目として、文体、引用、接続詞・接続助詞、疑問文、文末表現、「る・た・ている」テンス・アスペクトという6項目を取り上げ、パワーポイント資料を作成した。共有できる学習資源として、作文授業を担当する教師や作文を書く学習者が利用しやすい内容や形式にして公開していくことが重要である。

【キーワード】 作文 中上級学習者 文体 文脈 文法 教材共有

## Development of a Composition Guidebook for Intermediate-advanced Japanese Learners

KIDO Mitsuko, KATO Asagi, KOIKE Yasushi, HIRAKATA Yukiko,  
ISHIKAWA Sanae, KIMIMURA Chihiro

**[Abstract]** This paper outlines the process leading up to the preparation of a composition guidebook to support intermediate-advanced level learners learning composition for academic Japanese, and reports on the guidebook development. We hypothesize that during the composition learning process, learning will be more effective if learners, regardless of their levels, can refer to a set of essential learning items. Therefore, we prepared a composition guidebook based on the results of course syllabi and level check composition analysis in the intermediate-advanced composition classes of the supplementary Japanese language course of our university. At multiple learner levels, we observed errors related to style and context in grammar expression. Based on the errors, we selected six learning items, namely writing style, quotation, conjunction and conjunctive particles, interrogative sentences, sentence-ending expressions, and tense and aspect. We then created PowerPoint materials. As a learning resource that can be shared, it is important to make it accessible to both the teachers who are in charge of writing composition and to the learners who write compositions, in an easy-to-use content and format.

**[Keywords]** Composition, intermediate-advanced learners, writing style, context, grammar, material sharing

## 1. はじめに

ここ数年、大学での日本語教育において、学術活動を目的とするアカデミック・ライティング、大学の枠を超えた日本語力のスタンダード、日本語クラスのレベル間のアーティキュレーションに焦点をあてて日本語教育を行う動きが出てきている。一方、個々の大学における作文授業にこのような標準化をそのまま当てはめるだけではクラス運営は円滑に進まず、学習者や学習環境など各大学特有の要因も考慮する必要がある。スタンダードやアーティキュレーションを考慮した授業を行っていても、実際の作文授業において日本語レベル別にコース編成を行っていても、上下のレベルのクラスで同じ内容を繰り返し教えている実態もある。例えば、論文・レポート作成に必要な普通体、書き言葉と話し言葉の語彙の区別など、中級から上級まで繰り返し学習項目として取り上げざるをえない場合がある。このようなレベルを超えて共有すべき学習項目は、レベル縦断の内容として各レベルの学習者が必要に応じて参照できれば、より学習効果が上がると考える。

本稿では、中上級学習者のアカデミック・ジャパニーズのための作文学習を支援する作文ガイドブック作成に至る過程を概説し、試作した作文ガイドブックについて報告する。

## 2. 作文ガイドブック開発の経緯

現在、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育部門では、研究生・大学院生・大学院交換留学生を対象とする補講日本語コースにおいて、中上級レ

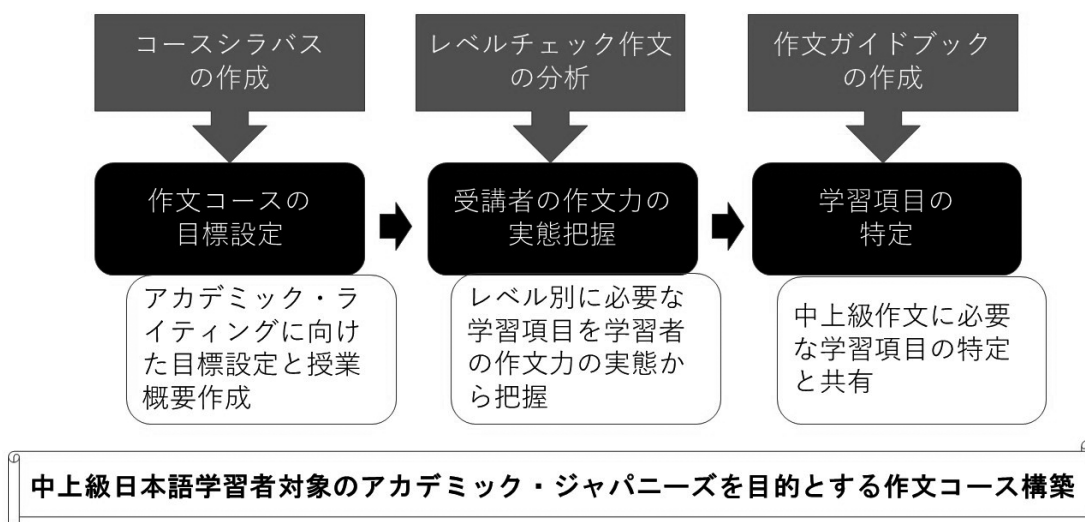


図1 作文ガイドブック開発に至る経緯

ベルの技能別クラスが開設されている。作文を学習する「書く」クラスは、4レベル（中級入門）、5レベル（中級前期）、6レベル（中級中期）、7レベル（中級後期）、8レベル（上級）の5レベルに分けて開講されている。作文ガイドブック作成は複数の日本語レベルの学習者に共通する作文作成上の問題が見られたことから出発している。これは補講日本語コースにおいてアカデミック・ライティングのために中上級レベル別に「書く」技能を向上させる作文コースを構築する過程で出てきた問題である。以下、図1に従って作文ガイドブック開発に至るまでの経緯を述べる。

## 2.1 アカデミック・ライティングに向けた目標設定と授業概要作成

コースシラバスの作成にあたり、目標設定と授業概要の確立が必要となる。筑波大学留学生センター（改組後はグローバルコミュニケーション教育センター）日本語コースにおいて、日本語補講コース（現在は補講日本語コース）で2010年度に中上級作文「書く」コースのレベル別授業の担当者が中上級作文クラスの日本語スタンダードを作成した。補講コース技能別「書く」の授業では、大学での学術活動のためのアカデミック・ライティングを目標とした。これは、対象者が研究生・大学院生・交換留学で来日する大学院の短期留学生が受講者であることによる。レベル別授業は、中級前期2レベル、中級後期2レベル、上級1レベルの計5レベルの段階に分かれている。

各レベルの目標設定および授業概要を作成するにあたり、大学で学術活動を行う上で必要な書く能力のうち、特にレポートを書く能力を最終目標とした。アカデミック・ライティングをCEFRの3つのカテゴリー、「書くこと全般」、「レポートや記事を書く」、「話題の展開（ディスコース能力）」のA2～C2を取り上げ、これらの例示的能力記述文から各レベルの目的・内容を選択し修正を行った上で、各レベルの授業概要を作成した。CEFRのA2～C2に当たる例示的能力記述文は、授業の実態から1つのレベルに1つの記述文を対応させるのは難しいため、各レベルの授業目標として単一のレベルに相当するものと複数のレベルに含まれるものとに分けた。以上、コースシラバスに関しては木戸・石上・加藤・田中・長戸・中山・和氣（2012）、受講者アンケート結果に関しては劉・木戸（2012）を参照されたい。

## 2.2 レベル別に必要な学習項目を学習者の作文力の実態から把握する試み

レベルチェック作文の分析を行ったのは、授業概要の作成において、作文コース全体の目標、および各レベルにおける目標を担当者間で議論する中で、学習者の作文の実態をレベル縦断的に把握する必要性を意識するようになったことによる。授業目標や授業内容を明確にするのと並行して、学習者の書く作文の実態を調査した上でより最適なコース運営を行うために、授業初日に行うレベルチェック作文の分析を授業担当者有志で行

い、構成、文体、文脈、語彙など作文に表れる問題点を把握した。2012年度及び2013年度に実施したレベルチェック作文をデータとして、学習者の作文の典型的問題点の把握を行った。対象データ数は、中級前期213、中級中期177、中級後期94、上級95の合計579件であった。レベルチェック作文は、初回授業時に20分程度、400字程度の手書きの作文で、毎学期「書く」コースでは全レベルで行っている。

分析の結果、全てのレベルで文体と文法の誤用があることがわかった。また、構成・表記・書式・語彙・文脈の誤用が複数のレベルで共通して挙げられた。特に、中級前期～中級後期レベルにおいては文法の誤用が多く見られた。文法の誤用の中には前後の文脈と関係のある誤用があった。これは作文における重篤度の高い誤用だと考えられる。以上のレベルチェック作文の分析結果に関しては加藤・小浦方・石上・木戸・田中・長戸(2016)を参照されたい。

### 2.3 中上級作文に必要な学習項目の特定と共有

作文ガイドブック作成は、先に行ったコースシラバス作成、さらにレベルチェック作文分析から出てきた学習項目の共有の必要性を満たす解決策として行ったものである。先のレベルチェック作文の分析結果から明らかになった学習者の作文の問題点は、誤用として作文に表れている。文体、文法をはじめ、構成・表記・書式・語彙・文脈の誤用は、そのレベル特有の問題だけではなく各レベル共通の問題があった。しかし、それぞれのレベルの授業で同じ説明や練習を毎回することは時間も労力もかかるため、これらの作文で典型的に見られる誤用を共有し、自律学習の可能性も含めて学習者にわかりやすい説明の記述を考える必要がある。そのため、現在、授業担当者間で中上級作文に必要で、かつ各レベルに共通する学習項目を選定し、作文学習の支援を目的とする作文ガイドブックを作成している。

学習項目の選定にあたり、作文に表れた文法の誤用は作文において文脈に関わるものを取り上げることにした。作文で取り上げる必要がないと判断した文法形式は対象としないことにした。レベルチェック作文の分析では、文法の誤用として、助詞相当語「において」「として」「にとって」などの誤用、形容詞や動詞の活用の誤用、助詞の誤用などが多く見られた。これらの誤用は文を正しく書くための文法の知識と運用力があれば回避できると考えられる。一方、作文に必要な文法という観点から学習項目を選定する場合、複数の文や段落を関係づける表現が重要である。そのような表現の誤用がなくなることは、学習者が一貫性や整合性のある文章を書くのに必要なことだと考える。

以上、作文ガイドブック開発に至るまでの経緯を説明した。作文ガイドブックでは、作文学習における必要性という観点から、レベルチェック作文分析において複数のレベルで誤用が見られた表現の中で、文脈に関わる文法形式および文体を取り上げることに

した。選定した学習項目についてパワーポイント資料を作成し、授業や自習で使用する教材を作成することを目指している。

なお、中上級日本語学習者の作文の誤用の傾向から、今回取り上げた6項目の他にも自動詞文、他動詞文、受身文など、文脈に関わる文法形式として作文ガイドブックに含まれるべき項目があり、今後も学習項目を増やして記述していきたいと考えている。その最初の試作として今回は6項目を選び、パワーポイント教材を作成した。

### 3. 作文ガイドブックの構成と内容

以上の経緯より、作文ガイドブックの学習項目として、文体、引用、接続詞・接続助詞、疑問文、文末表現、「る・た・ている」テンス・アスペクトという6項目を取り上げ、パワーポイント資料を作成した。以下、学習項目の執筆担当者<sup>1</sup>が各学習項目とその内容や趣旨について説明する。

#### 3.1 文体

文体で取り上げた項目は以下の通りである。

##### 1-1. 文体の概要

1. 文体とは 2. いろいろな種類の文体 3. 文体によって変わる言葉

##### 1-2. レポート・論文の文体

1. 普通体（だ・である体） 2. 連用中止形 3. 注意点

まとまった文章を書くためには、学習者自身が文体を意識し、コントロールすることが重要である。まず、場面、与える印象、表現手段の3つの観点から文体が決まることを明示した。作文の授業の中では、「話し言葉」と「書き言葉」、「丁寧体」と「普通体」が対立するかなのような説明がなされることがあるが、それでは学習者の文体の認識の問題は解決しないと考えた。検討した結果、場面と印象を軸にした4象限を用いて、6つの文体があることを示した（図2）。6つの文体にはそれぞれ例文を示したが、種類によっては2つの例文を用いることで、文体が「丁寧体」と「普通体」の対立を表すわけではないことを示した（図3）。

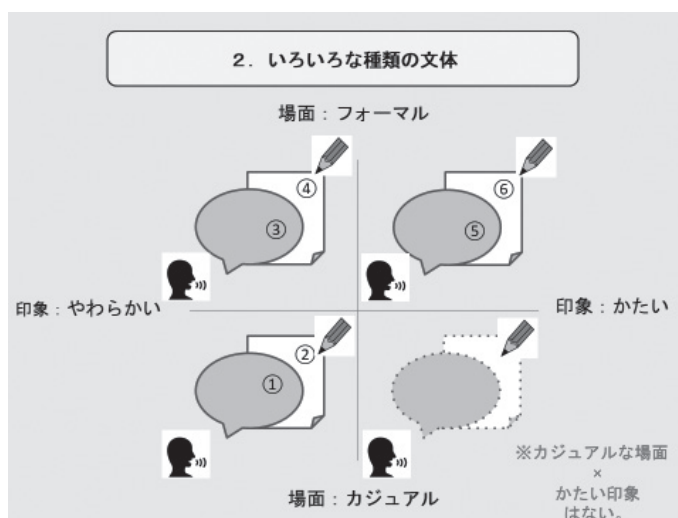


図2 文体の種類



また、文体によって使われる語が異なることが多いものとして、副詞と接続詞の代表的なものを表で示した。副詞と接続詞は多くの作文教材で取り上げられる項目ではある

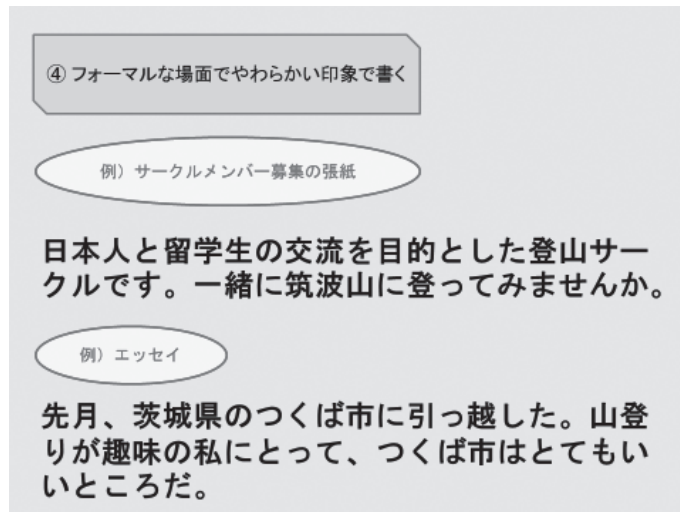


図3 フォーマル×やわらかい 文体の例文

が、場面と印象の組み合わせで決まるという観点からの表によって示した。さらに、加藤・小浦方・石上・木戸・田中・長戸 (2016) において、文体または文体に関わる語の混在が全てのレベルにおいて指摘されているため、例文を示す形で注意事項とした。

次に、使用する文体を「レポート・論文の文体」とし、その際には「普通体」を使用することを示した。また、特に「連用中止形」が必要になることを伝え、「て形」と比較する形で示した。文法的な誤用には当たらない問題ではあるが、「レポート・論文の文体」に欠かせない表現であると考えためである。

最後に、終助詞、縮約形、敬称及び敬語は使用しないことを明示し、「レポート・論文の文体」で望ましい形や語と合わせて示した。いずれも、レベルに関わらず学習者の作文に多く見られる問題である。

### 3.2 引用

引用では、以下のように3つの軸に沿って教材を作成した。

#### 2-1. 基本的な文型

1. 文型①：正用例、誤用例
2. 文型②：正用例、誤用例
3. 文型②の類似表現の違い

#### 2-2. 引用の種類

1. 直接話法と間接話法の表現方法の違い

2. 直接引用：正用例
3. 間接引用：正用例、誤用例
4. Web からの引用

2-3. 著者の意見と書き手の意見の明示

2-1 では、引用文を書く際に出典の書き方を間違える学習者が多くいたことから、基本的な文型として図4の2つを提示した。そして、特に、「[著者] の [情報源] によると」

文型①	[著者] の [情報源(著作など)]	によると	<情報>	ということだ とのことだ
文型②	[著者] は [情報源(著作など)]	で において	<情報>	と書いている と述べている と言っている

図4 引用の基本的な文型

や「[著者] は [情報源] で/において」での下線の助詞の誤用や①と②の文型の混用などが目立っていたことから、これらの正用例と誤用例を提示し、その違いのポイントを解説した(図5)。

2-2 では、引用には「直接話法(直接引用)」と「間接話法(間接引用)」の二種類が

文型① 誤用例2

文型①	[著者] の [情報源(著作など)]	によると	<情報>	ということだ とのことだ
-----	--------------------	------	------	-----------------

○原文 筑波国子『豆腐伝来史』  
豆腐は千五百年ほど前に中国から伝わったものである。

**誤用例**

・筑波国子の『豆腐伝来史』によると、豆腐は千五百年ほど前に中国から  
 伝わったものと言えた・と書いた・と考えられる。

「[著者]の[著作]によると」と書いた場合、文末には「書く・述べる・言う」などの動詞は**使わず**、「ということだ・とのことだ」を使う。

図5 引用 2-1 の提示例

あることを提示した。学生の作文では、レポート文であるのに文末に終助詞を入れてしまったり、「～テホシイ」などの願望の表現を使うべきところに「～テクダサイ」のような依頼の表現を使ってしまったりする例がよく見られた。また、疑問詞を用いる場合に



は助詞「か」を共起させる（「いつ事件が起こったか調べた」）規則と、疑問詞を用いない場合には「かどうか」を使う（「事件が起こったかどうか調べた」）規則を混用してしまう学習者も多く存在する。このような直接話法と間接話法の混用を学習者が避けられるようになるために、それぞれの違いを具体例を挙げて提示するとともに、正用例と誤用例を用いてポイントとなることを解説した。なお、この単元では、近年 web 上から情報を引用することも多くなったため、その場合の引用（文）の書き方も提示した。

2-3 では、引用文において著者の意見なのか作文の書き手の意見なのかを明瞭に区別する書き方について解説した。これは、上級レベルの学習者であっても誰の意見なのかが分かりづらい書き方をする学生が多く見られたことに依る。具体的には、著者の意見を示す場合には「(著者は) ～と考えている」のようにテイル形を用いることが多いのに対し、作文の書き手の意見を示す場合は「～と考えられる」のように受身形を使うことが多いということを示した。

### 3.3 接続詞・接続助詞

接続詞・接続助詞で取り上げた項目は以下の通りである。

#### 3-1. 接続詞・接続助詞とは

1. 接続詞・接続助詞とは
2. 主な接続詞・接続助詞

#### 3-2. 順接の接続詞

1. 「だから」・「そのため」・「したがって」
2. 「だから」の回避

#### 3-3. 逆接の接続詞・接続助詞

1. 逆接の接続詞・接続助詞
2. 譲歩の逆接文

#### 3-4. 列挙の接続詞

1. 列挙の接続詞
2. 列挙の接続詞の組み合わせ・連続
3. 列挙の注意点

#### 3-5. 補足の接続詞

1. 補足の接続詞

#### 3-6. おわりに

接続詞・接続助詞という品詞名を知らない学習者の存在が予想されることから、まず、以下のように、接続詞・接続助詞について説明文と例文を提示した。

接続詞・接続助詞は、前の語句・文と、後ろに続く語句・文をつなぐ機能を持つ言葉

## 3-1. 接続詞・接続助詞とは

1. 接続詞、接続助詞とは

- ◆接続詞、接続助詞とは
  - ・前の語句・文と、後ろの語句・文をつなぐ言葉
  - ・後に続く内容について予告する言葉
- ◆接続詞…後ろの文の先頭に置いて文をつなぐ
  - 例) 日本語の勉強は難しい。でも、おもしろい。
  - 日本語の勉強は難しい。だから、おもしろい。
- ◆接続助詞…文の切れ目である読点の直前に置いて文をつなぐ
  - 例) 日本語の勉強は難しいが、おもしろい。
  - 日本語の勉強は難しいから、おもしろい。

図 6 接続詞・接続助詞の説明

であることから使用頻度が高く、役割や類似表現が複数存在するため使い分けへの注意が必要となる。そこで、主な接続詞・接続助詞が持つ役割と、接続詞・接続助詞の例を提示した(図7)。「役割の分類」のうち、作文データにおいて誤用が多く見られた「順接、逆接、列挙、補足」の接続詞を取り上げた。

役割	役割の分類	接続詞の例	接続助詞の例
結果を示す	順接 (予想に沿った結果、因果関係を示す)	だから、そのため、したがって	から、ので、て/で
	逆説 (予想に反する結果を示す)	でも、しかし、ところが、(それ)にもかかわらず	が、けれど(も)、のに
内容を整理して示す	並列 (似た事柄を並べる)	そして、それから、また	
	対比 (対照的な事柄を並べる)	一方、これに対して、または	
	列挙 (順番をつけて並べる)	まず、第一に、最初に	
読み手の理解を深める	提言 (言い換えて説明する)	つまり、すなわち、あるいは	
	例示 (例をあげる)	例えば、実際、特に	
	補足 (付け加える)	また、さらに、ただし、なお	
	理由 (理由を示す)	なぜなら、というのは、というのも	から、ので、て/で
全体の流れを示す	転換 (話題を変える)	ところで、では、さて	
	結論 (話をまとめる)	このように、以上のように	

図 7 主な接続詞・接続助詞の例

3-2-1 正用例

1. 「だから」・「そのため」・「したがって」

正用例

① 作文学習は、自分の考えを説明したいとき非常に役立つと思う。だから、作文学習をしなければならぬと考えている。  
⇒主観的判断

② 作文学習は、自分の考えを説明したいとき非常に役立つ。そのため、考えを整理するために学びたいという人が多い。  
⇒客観的事実

③ この作文クラスには定員がある。したがって、定員を超えた場合は抽選で受講者が決まる。  
⇒必然的な結果

図8 順接の例

3-2-2 誤用例

2. 「だから」の回避

作文例

作文学習は、自分の考えを説明したいとき非常に役立つと思う。  
だから、作文学習をしなければならぬと考えている。

修正例

わたしは作文を学習しなければならぬと考えている。  
なぜなら、自分の考えを説明したいとき、非常に役立つと思うからだ。

客観的な内容の文で主観を述べる場合、「だから」の代わりに、理由を示す接続詞「なぜなら」を使い、「～からだ」で文を終える。

図9 「だから」の回避の例

取り上げた項目の中から、順接を例に述べる。作文データの中で出現頻度が高かった順接の接続詞「だから、そのため、したがって」であるが、作文教材の中で、「だから」は「話し言葉」であり、それに対応する「書き言葉」は「そのため、したがって」である、といった対比表の提示や説明がなされていることが多い。実際、そのように認識しているのであろうと思われる誤用が散見されたため、それぞれの順接の接続詞が持つ役割と正用例を提示した(図8)。

主観的判断を述べる場合「だから」の使用が適当であるが、客観性を重んじるレポートなどで主観的判断を述べる際には、「話し言葉」の印象が強い「だから」の使用は避けの方が良いと思われる。対処法として、理由を示す接続詞「なぜなら」を使い、「からだ」で文を終える文例を修正例として示した(図9)。

逆接、列挙、補足の接続詞についても、どのような内容にどのような接続詞が適当であるかを提示し、誤用例、修正例を示した。

### 3.4 疑問文

疑問文では以下のように、文の中の疑問文、疑問文で問題を取り上げる表現、疑問文で意見を言う表現の3つを主に取り上げた。

#### 4.1. 文の中の疑問文

1. 動詞文・形容詞文・名詞文の一部
2. 助詞と同じ働きの語の前
3. 「か」と「の」「こと」の違い
4. 文の中に疑問詞があるとき
5. 2つのことの名詞化 「こと」vs. 「か」
6. 「か」があるとき、ないときのちがひ

#### 4.2. 疑問文で問題を取り上げる表現

1. 「～のか」「～のだろうか」
2. 普通体と丁寧体
3. 疑問詞と「は」の間違い

#### 4.3. 疑問文で意見を言う表現

1. 「～のではないか」「～のではないだろうか」 2. 「～と思う」と「～のではないか」のちがい

図 10 に示した例のように、疑問文は作文の中では問題提起の表現や文の名詞化に関わる表現として表れる。「のだろうか」のような「のだ」文にしない誤用、「どのような問題があることについて考察した。」のような疑問詞を伴う節の名詞化の誤用が見られる。

まず、4-1 の文の中の疑問文について、学習者の作文では、名詞化「の」「こと」について、

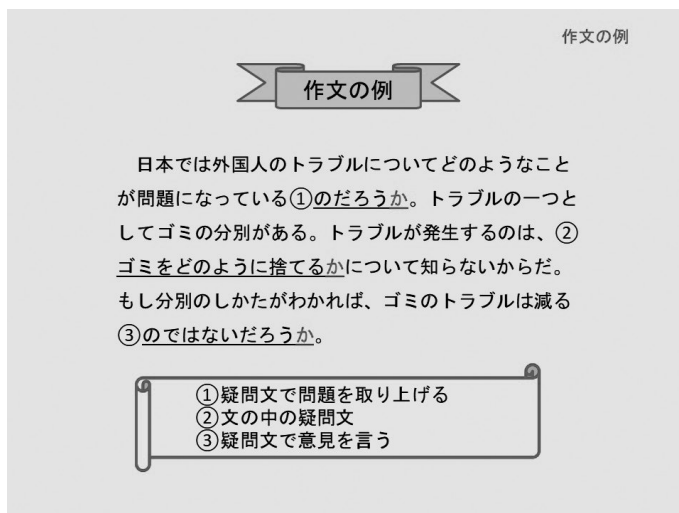


図 10 作文における使用例

疑問詞が含まれる場合に「か」ではなく「の」「こと」を用いる誤用が見られる。そこで、動詞文・形容詞文・名詞文の一部として「～かを知らない」のような例文を提示し、文の一部に疑問文が埋め込まれる場合を示した。その上で、助詞相当語でも疑問詞がある場合は「～かについて」のように「の」「こと」ではなく「か」を用いることを示した。

次に、4-2 では作文では問題提起の表現「～のか」「～のだろうか」を用いることを示した。問題提起に疑問文を用いる場合、特に初級から中級にかけて「のだ文」の疑問文を使わない誤用が見られ、問題提起に疑問文「～か」「～だろうか」がそのまま用いられている。また、文体の違う「～でしょうか」を普通体の作文に混在させる誤用も見られる。したがって、普通の文と「のだ文」の違い、文体の違いを意識させるようにした。

さらに、4-3 では意見の表現として「～のではないか」「～のではないだろうか」を取り上げた。これらは「～ではないか」「～ではないだろうか」と混同して誤用が出てきている。また、「～と思う」との違いなど作文の授業でよく質問される。「～のではないか」「～のではないだろうか」は1文だけ見ると誤用には見えないが、前後の文脈を見ると違和感のある使用が見られる。「ない」と「か」が含まれる複合辞であるため、否定の意味

と疑問の意味があるはずだと誤解する学習者もいる。つまり、「の」が抜けるという形態面の誤用、「～ではないか」と「～のではないか」を同一表現とみる誤用、学習者の間違っただけの意味予測による誤用の場合がある。そのため、複数の要因による誤用に注意しなければならない。

### 3.5 文末表現

文末表現では、以下のように各モダリティを8項目に分けて取り上げた。

- 5-1. 「と思う」「と思われる」「と考える」「と考えられる」
- 5-2. 「…べき」「…なければならない」
- 5-3. 「V - てほしい」「V - たい」
- 5-4. 「V - るつもり」
- 5-5. 「…かもしれない」「…だろう」
- 5-6. 「…にちがいない」「…はずだ」
- 5-7. 「…わけだ」
- 5-8. 「…のだ」

これら15の文末表現は、2.2節で述べた579件の学習者の作文データにおいて誤用や不自然な使い方が数多く確認された表現である。これらを学習者の誤りやすい文末表現として、誤用を例示しながら解説を行った。その際、学習者が個別の表現を体系的に理解できるように、類似表現や混同しやすい表現を対にして提示した。以下、各項目における学習者の誤用傾向と解説のポイントについて述べる。

5-1は、意見を述べる際に用いる文末表現の意味・用法の違いについて説明している。学習者が意見を述べる際に「と思われる」という表現を多用する傾向にあることから、「と思われる」の意味・用法を誤解している可能性が窺えた。そこで、類似表現である「と思う」「と考える」「と考えられる」を共に挙げ、書き手が文脈に合った表現を選択して適切に使用できるように、例文を提示しながら用法の微細な違いを解説した(図11)。

5-2では、「…べき」を用いた類似の誤りが作文データに多々見受けられたため、意味が似通っている「…なければならない」と比較して解説した。「…べき」が使用できない文章例を挙げ、使い分けを説明した。

5-3は、願望を表す「V - てほしい」と「V - たい」の使い方を学習者が混同している節があったことから、使用の際の留意点を提示した。

5-4の「V - るつもり」は、誤用の判定が困難であったが、文脈から書き手の意図により合致する表現を推測し、それを修正例として提示した。このような誤用例と修正例を複数提示することで、「つもり」よりも適切な表現があることを示した(図12)。

5-5 は、認識を表す文末表現として、「…かもしれない」と推量の「…だろう」を対に

5-1. と思う/と思われる/と考える/と考えられる

**と思う** …自分の主観的・個人的な意見を述べる  
ある国の言語を学習することは、その国の文化を学ぶことだと思う。

**と思われる** …「自発的にそのような判断が成立する」ことを表す  
自分の意見を客観的に述べる  
2020年に向けて、日本語教員の需要は今後高まっていくものと思われる。

**と考える** …頭を働かせて客観的に判断した意見を述べる  
問題の解決には、状況を的確に把握することが必要だと考える。

**と考えられる** …自分の考えを根拠にもとづいて客観的に述べる  
労働人口が減少していることから、労働力の確保が重要な課題となると考えられる。

図 11 意見を述べる際の文末表現の違い

5-4-1 誤用例2

5-4-1. V-るつもり

**誤用例**  
日本語の本を読んで、日本語の作文のルールを勉強して、正しい文法を使うつもりです。

**修正例**  
日本語の本を読んで、日本語の作文のルールを勉強して、正しい文法が使えるようになりたい。

実際に正しい文法が使えるようになるかどうかは不確定なので、「つもり」を用いるのは不適切である。ここでは願望の「たい」を用いたほうがよい。

図 12 「つもり」の誤用例と修正例

して提示した。特に「…だろう」には、不適切な使用が多く見られ、適切な使用の難しさが窺えた。そこで、不自然な「…だろう」の例文を挙げ、何が問題なのかを明らかにし、文脈に適切な代替表現を修正例として提示した。

5-6 では、蓋然性の高さを表す文末表現として、「…にちがいない」と「…はずだ」を取り上げた。誤用として問題となったのは、「…はずだ」の使い方であった。根拠のない判断を述べる文章や書き手自身の行動については「…はずだ」を用いることができないことを、例を挙げて解説した。



5-7の「…わけだ」は、本データでは使用例自体が少なかったが、上級学習者であっても適切な使用が困難な文末表現と判断し、論理的帰結を表す表現であることを、誤用例、正用例を挙げながら解説した。

5-8では、学習者の作文に非常に多く見られるものの適切な使用が少ない「…のだ」を取り上げた。学習者の不適切使用で特に顕著なのは、「のだ」を自分の言動に関して用いて〈強調〉や〈理由〉を後付けしようとする例である。そこで、まずは「のだ」の基本的意味が関連付けであることを図解し、そこから〈説明〉〈解釈〉〈言い換え〉等のさまざまな意味が文脈に応じて生じることを解説した。また、長い文脈から引用した正用例を挙げ、文章の最後に「のだ」を用いて書き手の意見をまとめ上げる用法もあることを説いた。

今回取り上げたモダリティは文法書の扱いでは、例えば「べきだ」VS「ほうがいい」、「わけだ」VS「のだ」の使い分け、といった形で挙げられることがあるが、学習者の作文を見ると必ずしもその使い分けが困難となっているわけではないことが分かる。学習者の誤用から学習者特有の問題点や作文する上での難しさを見出し、それらに応じたガイドを行うことは、自律した書き手を育てる近道になり得ると考える。

### 3.6 「る・た・ている」テンス・アスペクト

ここではまず、「る・た・ている」の基本的な用法を紹介し、次に特殊な用法として「る・た・ている」が固定される用法を扱った（例えば情報源を表す場合、「～と述べている」のように主に「ている」形を使う、など）。その後、作文やレポートでよく扱われる題材として「状況を説明する、人物紹介、仕組みの説明、やり方や流れの説明、論文・レポートの序論や結論でよく使われる形」の例文を挙げた。取り上げた項目は以下の通りである。

- 6-1. 「る」の基本の使い方
- 6-2. 「た」の基本の使い方
- 6-3. 「ている」の基本の使い方
- 6-4. 特別な場合
- 6-5. 使用例
  - 1. 状況説明 2. 人物説明 3. 仕組みの説明 4. あらすじ
- 6-6. 論文・レポートでの使用例

6-1. 「る」形の基本の使い方

	使うとき	使われる言葉
1	今の状態を表す	形容詞、名詞、動詞の一部
2	未来を表す	動詞の一部
3	繰り返し起こること、恒常的な習慣を表す	動詞
4	一般的な事実を表す	形容詞、名詞、動詞
5	ある行為がまだ終わっていないことを表す (未完了)	「(まだ) Vていない」

6-2 「た」形の基本の使い方

	使うとき	よく一緒に使う言葉
1	今より前のことを表す (過去)	・過去を表す言葉 「昨日、先週、子供の時」など
2	すでに終わったことを表す (完了)	・完了した時間を表す言葉 「昨日、去年、さっき」など ・「もう」

6-3. 「ている」形の基本の使い方

	使うとき	使われる言葉
1	今起こっていることを表す (進行)	動詞の一部
2	あることが起こって、その結果が残っていることを表す (結果残存)	動詞の一部
3	現在の状態を表す	動詞の一部
4	繰り返し起こること、一時的な習慣を表す	動詞
5	過去のある時間に起こったことを表す	「V-ていた」

6-4. 特別な場合

ある場合には特に決まった形を使うことがある。  
ここでは、その中から作文やレポートで使いやすい5つものを紹介する。

- ① 思考を表す表現  
「-と思う/考える」と「-思っている・考えている」
- ② 以前と現在とで変化が起きた場合
- ③ 情報源を表す場合 (引用)
- ④ 実際には起こらなかったことを表す場合
- ⑤ 論文・レポートの中で使う場合  
⇒6-6を参照

図 13 「る・た・ている」で扱った基本の使い方と特別な場合

「る・た」に関しては母語に時制をもつ学習者は基本的な部分では誤用は少ない。しかし、中国語話者など時制のない言語を母語に持つ学習者には基本的な用法でも誤用が見かけられる。また、「ている」に関しては英語などで用いられるいわゆる現在進行形などとは用法が異なる場合があり、その用法では母語に関わらず誤用が見受けられる。そのため、まずそれぞれの形の基本的な用法を提示した。ただし、作文ガイドブックであるという趣旨に沿って、主に作文・レポートで使用される可能性の高いものに絞って扱っている。そのため、例えば、発見の「た」(例:「あ、バスが来た」)などのようにある状況に直面した際に使われる機能は扱っていない。

次に特定の状況下で「る・た・ている」が固定されて使われるものを取り扱った。取り上げたのは、1. 主語によって「る・た・ている」が変わる「思う/考える、思っている/考えている」、2. 引用 (3.2 で引用を独立して扱っているため、引用と行為の描写の違いについてのみ扱った)、3. 過去と現在とで状況が変化した場合の使い分け、4. 反事実

の表現(「～するべきだった」など)である。これらも母語に関わらず誤用が見られる。さらにこれらの用法は誤用された場合、文法的には誤っていないがゆえに訂正されず、読み手の誤解を招く可能性がある。そのため、特に「特別な場合」として取り上げた。

最後に、内容によってどの形がよく使われるのか、という観点から「る・た・ている」の使い分けを紹介した。1つのまとまった内容を書く場合、その内容によって頻繁に使われる形があることが分かれば、どれを使うべきか迷った場合の指針になるであろうと判断したためである。取り上げたのは作文・レポート・論文で使われる可能性の高い5つの場面と論文・レポートの序論、実験や調査の計画／結果報告、結論での使い方である。論文・レポートで使われる表現は初級から中級前期の学生にはまだ早い、中級後期から上級レベルの学生では学生生活に必要なことになるであろうことを考え、取り上げた。

#### 4. おわりに

以上、中上級学習者のアカデミック・ジャパニーズのための作文学習を支援する作文ガイドブック作成に至る過程を概説した上で、作文ガイドブック開発について学習項目とその要点を述べた。今までコース担当者が行ってきたコースシラバス作成とレベルチェック分析の成果を踏まえることによって、中上級作文学習者の作文の誤用の中でも学習者にとって必要な学習項目と説明を取り上げることができた。

最近ではコーパスやオンラインで利用できるツールやスマートフォンのアプリなど日本語教育でも様々な素材や学習ツールが開発されつつある。コーパス研究が盛んになってきており、公開データとして学習者作文や誤用情報や添削を含んだ作文コーパスも利用できるようになった。しかし、実際に作文コースを担当する立場から見ると、比較材料としての作文データやコーパス内の作文誤用の網羅的な分類を提示されても、実際の授業に活用するには困難を伴う。コーパスという素材を学習に活用するには学習者が理解し活用しやすい形にする必要がある。

作文に必要な学習項目として文体と文脈に関わる文法的な表現に特化してパワーポイント資料の形で教材開発を行ったのは、学習教材の共有化にあたって教師や学習者が活用しやすい形での提供を意識したためである。電子化された教材ならば、コンピューター上で他のアプリケーションを用いて漢字語彙などを調べながら使用することができる。また、音声読み上げソフトで聞きながら学習できる。共有できる学習資源として、作文授業を担当する教師や作文を書く学習者が利用しやすい内容や形式にして公開していくことが今後の課題である。

#### 謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP16K02795 の助成を受けている。

## 注

1. 3章は学習項目の担当者が執筆した。3.1 文体(加藤)、3.2 引用(小池)、3.3 接続詞・接続助詞(石川)、3.4 疑問文(木戸)、3.5 文末表現(君村)、3.6 「る・た・ている」テンス・アスペクト(平形)。

## 参考文献

- 加藤あさぎ・小浦方理恵・石上綾子・木戸光子・田中孝始・長戸三成子(2016)「中上級日本語学習者のレベルチェック作文における典型的問題点」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31:127-145
- 木戸光子・石上綾子・加藤あさぎ・田中孝始・長戸三成子・中山健一・和氣圭子(2012)「日本語スタンダードに基づく中上級日本語作文コースの構築に向けてー補講コース『J500-900 書く』の報告ー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号:207-227
- 劉雅静・木戸光子(2012)「筑波大学留学生センターにおける学習者のニーズ分析ーJ500-900『書く』の場合ー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号:319-332

## パワーポイント教材作成の参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編(2015)『改訂版 大学・大学院留学生の日本語② 作文編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編(2015)『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』アルク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵巧雄・清水佳子(2003)『日本語文法演習 時間を表す表現ーテンス・アスペクトー』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2006)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 石黒圭(2016)『「接続詞」の技術』実務教育出版
- 市川保子編(2010)『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ 日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 井下千以子(2014)『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶応義塾大学出版会

- 今村和宏 (1996) 「論述文における「のだ」文のさじ加減 – 上級日本語学習者に文の調子を伝える試み–」『言語文化』33、一橋大学語学研究室
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2014) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第2版] – プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房
- 沖森卓也 (2016) 『文章が変わる接続詞の使い方』ベレ出版
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 小林隆・澤村美幸 (2014) 『ものの言いかた西東』岩波新書
- 小森万里・三井久美子 (2016) 『ここがポイント！レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版
- 齋藤孝 『読書力』(2002) 岩波新書
- 佐藤政光・田中幸子・戸村佳代・池上摩希子 (2002) 『にほんご作文の方法』第三書房
- 白川博之 (2007) 「学習者の誤用・非用をどう考えるか」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 (文化教育開発関連領域)』56号：173-179
- 友松悦子・和栗 雅子 (2004) 『短期集中初級日本語文法総まとめ ポイント 20』スリーエーネットワーク
- 友松悦子 (2008) 『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 友松悦子・和栗雅子・宮本淳 (2010) 『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』アルク
- 二通信子・佐藤不二子 (2003) 『改訂版 留学生の論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『モダリティ』くろしお出版
- 農林水産省ホームページ「日本の自給率」  
[http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu\\_ritu/012.html](http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html)、2017年9月20日閲覧
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 由井紀久子・大谷つかさ・荻田朋子・北川幸子 (2012) 『中級からの日本語プロフィエンスライティング』凡人社